



木更津市教育委員会 元教育長 西村 堯 選

レギュラーになれないきみへ

元永 知宏 著 ・ 岩波ジュニア新書
ISBN978-4-00-500906-0
800円 + 税

私は若い頃、どういう訳だか、バレーボール部の顧問を命じられて、40歳近くまで、つとめてきた。以前にも書いたが、私は、バレーボールの選手としての経験は全くない。

最初は、生徒のほうが技倆はずっと上だった。

顧問を担当して、いつも、心にうずいていたのは、どの生徒を選手として起用するか、そして、だれを補欠とするか、補欠の生徒のケアをどうするかということであった。

うまい具合に、6人(9人制では9人)が、3年生で、技倆もほぼ同じであればいいが、年度によって、3年生でも、補欠となる生徒も出たり、また、2年生の中に優れた技倆の生徒がいれば、3年生の中に割り込ませるようなこともあった。

練習に出てこなかったり、あまり熱心でない3年生ならともかく、毎日練習に出てきて黙々とボール拾いをしている3年生を補欠に回すのは、しのびない。

このことは、ずうっと心の底に澱の如く、沈んでいた。

そういう時に、たまたま、本書に巡り合った。

どんなことが書いてあるのか。今さらだけれど、補欠として去った生徒達への贈る言葉となり得るのだろうか、とページをめくった。

本書は、著者が野球で「補欠を経験した人、補欠の働きの大切さを知る人にお話を」聞いた記録である。

“

スポーツを始めるときに、自分から希望して補欠になる人はいません。誰だって試合に出て活躍したい。しかし、チャンスを与えられないときにどうするのか？

(中略)

チームにどう貢献するのか、仲間に対して何ができるのか？8人の野球人が示す「答え」をあなたの目で確かめてみてください。

(はじめに)

と述べる。

自分の補欠経験を語る人たちは、皆、甲子園の常連校で野球部に属していた人たちである。

塩見直樹氏の話を紹介しよう。

塩見氏は木更津中央高校(現・木更津総合高校)、暁星国際学園、国学院久我山高校で野球部の指導に携わった。

“

補欠という存在がなければ、野球というスポーツは成り立ちません。しかし、チームの中には、いい補欠もいれば、悪い補欠もあります。塩見さんにはその違いがどう見えてるのでしょうか。

(p.65)

“

(前略)

大切なことは、自分よりも優れた能力を持つ人間を認められるかどうか。自分の能力を見極めながら、人の意見も聞きながら、自分のポジションを知ることが大事なんです。

(中略)

もちろん、指導者の責任でもあるんですが、ひとりひとりに役割を持たせることが重要だと思っています。チームのためにどんな貢献をするのかを教えてあげないと。

(p.66 塩見氏の言葉)

塩見氏は、今、ベンチ入りできない3年生のための「引退試合」を企画・運営している(一般社団法人 応援プロジェクト の設立者)。「野球を続けていればいいことがあるよと示すことが僕の使命なんじゃないかと思うようになった」と氏は述懐する。

読後に思ったが、ここに登場する8人の方々は、それぞれ甲子園の常連校であり、その中の補欠を経験した人たちだが、地方大会一回戦でコールド負けして、高校の野球にピリオドを打つ生徒がたくさんいるのである。むしろ、圧倒的に、こういう人たちの方が多い。

そういう「補欠」の人たちにどんな言葉を贈るのか。

著者は、「おわりに」の中でこう述べる。

“

私が本書を書くことを決めたのは、補欠に甘んじている人に「そこ」が終わりでないを知ってもらうためです。

(中略)

ゴールは「いま」ではありません。時間が経ってから「あのときの経験があったから」と思い直すことがきっとあるでしょう。

(p.194)

本書の帯に

“

ゴールは「いま」じゃない

(帯)

とある。

部活動の指導者にも、そして、今年も補欠として部活を続ける「きみへ」贈りたい一書である。